学位被授与者氏名	趙　聰穎（ちょう　こんぎゃん）
論文題目	介護における移乗ロボット・感知センサーの導入による効果の分析
論文審査結果の要旨	介護現場における実体験を基に、実際のケアワーカー10 名へのインタビューを実施し、逐語録をもとに土屋のテーマティック・アナリシス法を応用した解析手法を採用している。この点において、現場目線の具体的なデータ収集とその反映は大変評価できる。しかし、その作業自体は膨大な労力を要したものと推察されるが、論文内では解析に用いた具体的なツールの記述が不十分であり、再現性や手法の透明性という観点から明確な説明が求められる。 結果図の作成にあたっては、効果と具体的な行為が混在して記述され、移乗ロボットや感知センサーの使用行為とそれによってもたらされる効果との区別が曖昧となっている点に改善の余地がある。また、因果の流れ図においては「リスクマネジメント」と「導入時の課題及び現場の問題」といった項目が独立して扱われるべきであると考えられ、ワンステップ追加するなど、より明確な整理が必要である。 さらに、本研究対象者であるケアワーカー10 名は、キャリア、性別、年齢などの属性にバラツキがあることから、各属性による ICT 機器活用時の違いや因果モデルへの影響についての考察が十分になされていない。属性の違いが利用者へのケアや介護職員の操作習熟度などに及ぼす影響を検討することにより、より多角的な解析が可能であったであろう。また、リスクマネジメントの概念については、現場での改善活動としての学習や研修と混同している印象が否めず、作用と効果を明確に分離し図示する工夫が要求される。 最終試験の質疑応答の場面において、得られたデータに基づく議論と院生自身の個人的経験に起因する回答が区別されず、客観性に欠ける部分が散見された。経験に裏打ちされた意見は一定の説得力を有するものの、論文全体としては研究上のデータを明確な根拠として論じる姿勢が求められる。なお、院生が介護現場で実務経験を積んできた点は大いに評価できるが、経験主義に留まりすぎず、より客観的なデータ分析への転換が望まれる。 また、論文全体において日本語表現の誤りが多く見受けられる。中国からの留学生という厳しい環境下における苦労は理解できるものの、専門的な原稿チェックを受けるなど、言語面での品質向上に努めることが今後の課題である。 総合的に判断すると、本論文は介護福祉実践における ICT 技術の導入効果を現場の実態に即して検討した点で実務的意義が認められるものの、方法論の詳細な記述、結果の整理と図示、及び属性差異に基づく影響の多角的検証に関して改善の余地がある。今後は、論文執筆上の形式を厳格化し、再現性のある手法の明示と客観的データに基づく論述を徹底することで、研究の精度及び説得力の向上が期待される。 2025 年 2 月 17 日に、北九州市立大学北方キャンパス 4 号館 4-205 教室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士(人間関係学)として十分な内容であると判定した。